

第4章 火災による死傷者の状況

1 火災による死者

- 火災による死者が前年と比較して7人増加しました。
- 自損を除く死者74人全員が建物火災での死者でした。

(1) 発生状況

ここでとりあげる「火災による死者」とは、火災に起因して死亡した者をいい、「自損行為」とは、放火による自損行為のことをいいます。

ア 発生状況

火災による死者の年別発生状況をみたものが表4-1-1です。

平成30年中の死者発生状況をみると、全火災件数の2.0%にあたる79件の火災で86人が死亡しており、前年と比較して死者の発生した火災件数は3件増加し、死者数は7人増加しています。

表4-1-1 年別発生状況（最近10年間）

年 別	全 火 災 件 数	火 災 の 発 生 し た 件 数	死 者 発 生 率 (%)	死 者 数 合 計	の 自 損 行 為 以 外 の 死 者 数	年 齢 区 分					
						乳 幼 児	未 成 年	成 人	前 期 高 齢 者	後 期 高 齢 者	不 明
21年	5,598	118	2.1	129(31)	98	1(-)	4(-)	65(22)	16(6)	42(2)	1(1)
22年	5,086	93	1.8	105(16)	89	2(-)	6(-)	39(10)	25(2)	31(2)	2(2)
23年	5,340	78	1.5	84(14)	70	-(-)	1(-)	37(10)	12(2)	34(2)	-(-)
24年	5,088	103	2.0	115(21)	94	3(-)	2(1)	44(15)	23(4)	42(1)	1(-)
25年	5,190	80	1.5	87(10)	77	-(-)	1(-)	30(7)	16(2)	40(1)	-(-)
26年	4,804	87	1.8	94(16)	78	-(-)	-(-)	21(7)	25(8)	47(-)	1(1)
27年	4,430	87	2.0	95(16)	79	2(-)	-(-)	34(10)	24(3)	35(3)	-(-)
28年	3,980	77	1.9	83(15)	68	1(-)	-(-)	28(9)	28(6)	24(-)	2(-)
29年	4,204	76	1.8	79(14)	65	-(-)	1(-)	27(8)	20(5)	30(-)	1(1)
30年	3,972	79	2.0	86(12)	74	-(-)	-(-)	24(3)	30(6)	32(3)	-(-)

注1 火災件数は、治外法権火災及び管外からの延焼火災を除いています。

2 () は「自損行為による死者」数を内数で示したものです。

年齢区分別と火災種別、男女別の死者発生状況をみたものが表 4-1-2 です。

男女別発生状況をみると、男性が 58 人（67.4%）、女性が 28 人（32.6%）となっており、男性が 7 割近くを占めています。

表 4-1-2 年齢区分と火災種別、男女別死者発生状況

死者の年齢区分		火 災 種 別							男 女 別	
		合 計	建 物 火 災					そ の 他	男 性	女 性
			小 計	全 焼	半 焼	部 分 焼	ぼ や			
火 災 件 数		79	73	13	10	42	8	6	性	性
死 者 数	合 計	86	80	14	10	48	8	6	58	28
	自 損 行 為 以 外	74	74	14	9	44	7	—	47	27
	乳 幼 児	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	未 成 年	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	成 人	21	21	2	—	18	1	—	15	6
	前 期 高 齢 者	24	24	6	4	12	2	—	16	8
	後 期 高 齢 者	29	29	6	5	14	4	—	16	13
	不 明	—	—	—	—	—	—	—	—	—
数	自 損 行 為 に よ る 死 者	12	6	—	1	4	1	6	11	1

イ 自損行為による死者

自損行為による死者 12 人の発生状況について男女別をみると、男性が 11 人（91.7%）、女性が 1 人（8.3%）となっており、男性が 9 割以上を占めています。

自損行為による死者を火災種別ごとにみると、建物火災及び建物以外の火災が各 6 人（50.0%）となっています。建物火災での死者 6 人全員が住宅や共同住宅の自宅で灯油等をかぶり、自らライター等で火をつけて自損を図っています。建物火災以外では、車両内や敷地内において灯油等をかぶり自損を図ったものです。

以下、自損行為による死者 12 人を除いた 74 人について分析します。

ウ 年齢別発生状況

年齢区分別に死者の発生状況をみると、高齢者の死者は 53 人（71.6%）で、自損行為を除く死者数の 7 割以上を占めています。

エ 火災種別・程度別発生状況

火災種別ごとの死者発生状況をみると、74 人全員が建物火災で発生しています。建物火災による死者のうち、部分焼以上に延焼拡大した火災（以下「延焼火災」という。）による死者は 67 人（90.5%）発生しています。

オ 月別火災件数と死者発生状況

月別の火災件数と、自損行為を除いた死者の発生状況をみたものが表 4-1-3 です。

1 月から 3 月及び 12 月は火災の多発する時期で、この期間の火災件数は 1,518 件（38.2%）で、死者数は 47 人（63.5%）となっており、自損行為を除く死者数の 6 割以上を占めています。

表 4-1-3 月別火災件数と死者発生状況

項 目		月 合計	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
火 災 件 数		3,972	393	392	337	376	328	282	303	317	227	328	293	396
死 者 数	合 計	74	11	16	7	3	5	3	6	1	3	2	4	13
	高 齢 者 以 外	21	2	4	1	—	1	—	4	1	—	1	2	5
	高 齢 者	53	9	12	6	3	4	3	2	—	3	1	2	8
高 齢 者 の 占 め る 割 合 (%)		71.6	81.8	75.0	85.7	100.0	80.0	100.0	33.3	0.0	100.0	50.0	50.0	61.5

注 1 火災件数は、治外法権火災を除いています。

2 死者数は、自損行為による死者を除いています。

(2) 出火原因別発生状況

発火源別の経過・火災種別死者発生状況をみたものが表 4-1-4 で、年齢区分と発火源別にみたものが表 4-1-5 です。

表 4-1-4 発火源別の経過・火災種別死者発生状況

発火源		合計	経過							火災種別				
			火源が落下する	可燃物が接触する	不適当な処に捨てる	火源が転倒する	電線が短絡する	放火	その他・不明	建物				
										小計	全焼	半焼	部分焼	ぼや
合計		74	20	12	6	2	2	2	30	74	14	9	44	7
たばこ		26	20	-	6	-	-	-	-	26	2	1	20	3
電気設備機器	電気ストーブ	6	-	6	-	-	-	-	-	6	1	1	4	-
	電気こんろ	1	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
	電気毛布	1	-	-	-	-	1	-	-	1	1	-	-	-
	半田ごて	1	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-	-	-
	カーボンヒータ	1	-	1	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
	コード*	1	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	1	-
ガス設備機器	アセチレンガス切断器	5	-	-	-	-	-	-	5	5	-	-	5	-
	ガスこんろ	1	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
	ガステーブル	1	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-
	ガスストーブ	1	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
	簡易型ガスこんろ	1	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-	-	-
灯明*		3	-	1	-	2	-	-	-	3	-	1	2	-
焼却火		2	-	-	-	-	-	-	2	2	2	-	-	-
石油ストーブ		1	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	-
ロウソク		1	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	1	-
ライター		1	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	1
不明		20	-	-	-	-	-	2	18	20	5	5	10	-

注 自損行為による死者を除いています。

表 4-1-5 年齢区分と発火源別死者発生状況

発火源		合計	年齢区分					
			乳幼児	未成年	成人	前期高齢者	後期高齢者	年齢不明
合計		74	-	-	21	24	29	-
たばこ		26	-	-	10	12	4	-
電気設備機器	電気ストーブ	6	-	-	-	1	5	-
	電気こんろ	1	-	-	-	-	1	-
	電気毛布	1	-	-	-	-	1	-
	半田ごて	1	-	-	-	1	-	-
	カーボンヒータ	1	-	-	-	-	1	-
	コード*	1	-	-	-	1	-	-
ガス設備機器	アセチレンガス切断器	5	-	-	4	1	-	-
	ガスこんろ	1	-	-	-	-	1	-
	ガステーブル	1	-	-	1	-	-	-
	ガスストーブ	1	-	-	-	-	1	-
	簡易型ガスこんろ	1	-	-	-	1	-	-
石油ストーブ		1	-	-	-	-	1	-
灯明*		3	-	-	-	1	2	-
焼却火		2	-	-	2	-	-	-
ロウソク		1	-	-	-	1	-	-
ライター		1	-	-	-	-	1	-
不明		20	-	-	4	5	11	-

注 自損行為による死者を除いています。

ア たばこ

たばこによる火災の死者は 26 人（35.1%）で、前年と比べて 8 人増加しています。

年齢別では前期高齢者が 12 人（46.2%）、次いで成人が 10 人（38.5%）などとなっています。

経過をみると、「火源が落下する」が 20 人（76.9%）と 8 割近くを占めています。

「火源が落下する」のうち、「寝たばこ」によるものが 1 人（5.0%）発生しています。

たばこが出火原因である場合、概ね無炎燃焼を継続してから有炎となり燃え上がるため、火種の落下直後は気が付かない場合が多いと考えられます。

イ 電気設備機器

電気設備機器による火災の死者は、11人（14.9％）発生しており、このうち電気ストーブが6人（54.5％）、電気こんろ、電気毛布、半田ごて、カーボンヒータ及びコード*が各1人（9.1％）などとなっています。

経過をみると、電気ストーブに衣類や布団が接触したり、落下したりして出火したものや、電気毛布の電源コードが何らかの理由で短絡し出火したものなどとなっています。

ウ ガス設備機器

ガス設備機器による火災の死者は、9人（12.2％）発生しており、このうちアセチレンガス切断器が5人（55.6％）、ガスこんろ、ガステーブル、ガスストーブ及び簡易型ガスこんろが各1人（11.1％）となっています。

経過を見ると、ガステーブルを使用中に着衣に着火し出火したものや、簡易型ガスこんろを使用中にあふれ火が付近の可燃物に着火し出火したものなどとなっています。

事例 1 灯明が転倒したことにより出火し死者が発生した火災			
構 造 ・ 用 途 等	防火造 2/0 住宅	出火階・箇所	1 階・居室
焼 損 程 度	建物部分焼 1 棟 20 m ² 等焼損 死者 2 人 傷者 1 人		
この火災は、住宅の 1 階居室から出火したものです。 出火原因は、火元者又は火元者の姉が仏壇に供えた灯明を転倒させたことにより出火したものです。 火元者又は姉が何らかの理由で転倒させたことに気がつき、姉が通報しました。 火元者と姉は出火した居室とは別の箇所からそれぞれ消防隊により救助されましたが、死亡が確認されました。			

2 火災による負傷者

○ 火災による負傷者が前年よりも 40 人増加しました。

(1) 発生状況

ここでとりあげる「火災による負傷者」とは、火災に起因して負傷した人をいいます。

ア 発生状況

火災による負傷者の年別発生状況をみたものが表 4-2-1 です。

表 4-2-1 年別発生状況（最近 10 年間）

年 別	合 計	負 傷 者 区 分			
		一 般 人			消 防 活 動 従 事 者
		小 計	自 損 行 為 以 外	自 損 行 為	
21 年	1,025(9)	1,003(9)	983(8)	20(1)	22
22 年	932(9)	913(9)	897(7)	16(2)	19
23 年	962(13)	944(13)	918(11)	26(2)	18
24 年	832(7)	814(7)	802(7)	12(-)	18
25 年	781(3)	763(3)	744(3)	19(-)	18
26 年	790(8)	777(8)	761(7)	16(1)	13
27 年	827(4)	815(4)	804(4)	11(-)	12
28 年	853(8)	842(8)	831(7)	11(1)	11
29 年	758(9)	750(9)	734(7)	16(2)	8
30 年	798(19)	787(19)	775(18)	12(1)	11

注 1 消防活動従事者とは、消防職員、消防団員などの消防活動等に従事した者の区分です。

2 () 内は、30 日死者(火災による負傷者のうちで、48 時間を超え 30 日以内に死亡した人)を内数で示したものです(「30 日死者」の項を参照)。

平成 30 年中に、負傷者が発生した火災は 530 件で、798 人が負傷しており、前年と比べて負傷者の発生した火災件数は 39 件減少し、負傷者は 40 人増加しています。このうち一般人の負傷者は 787 人(98.6%)で前年と比べて 37 人増加し、消防活動従事者(消防職員・消防団員などの消防活動等に従事した者)が 11 人(1.4%)で、3 人増加しています。

また、負傷者の発生率(負傷者の発生した火災が、総火災件数に占める割合)は 13.3%で、前年と比べて 0.2 ポイント減少しています。

3 人以上の負傷者が発生した火災は 46 件で、237 人が負傷しており、前年と比べて、火災

件数は12件増加し、負傷者は100人増加しています。これらの火災では、住宅や共同住宅から出火し、避難の際に廊下や階段などで煙を吸って負傷するケースや、就寝中に火災が発生し避難が遅れ、負傷するケースが多くみられます。

なお、ここからは火災による負傷者のうち、消防活動従事者（11人）及び自損行為による負傷者（12人）を除いた775人について分析します。

イ 火災種別・年齢区分と受傷程度の状況

火災種別と年齢区分別に受傷程度をみたものが表4-2-2です。

火災種別ごとに負傷者の発生数をみると、建物火災での負傷者は742人（95.7%）と大部分を占めています。さらに建物火災を火災程度別でみると、延焼火災では421人（56.7%）発生し、建物火災の6割近くを占めています。

受傷程度別でみると、軽症が460人（59.4%）で最も多く、負傷者の6割近くを占めています。

火災による負傷者を、高齢者と高齢者以外でみると、高齢者以外は538人（69.4%）で、高齢者は237人（30.6%）となっており、高齢者の割合は前年と比べて2.5ポイント減少しています。

表4-2-2 火災種別・年齢区分別受傷状況

受 傷 程 度	合 計	火 災 種 別							年 齢 区 分				
		建 物					車 両	そ の 他	乳 幼 児	未 成 年	成 人	前 期 高 齢 者	後 期 高 齢 者
		小 計	全 焼	半 焼	部 分 焼	ぼ や							
合 計	775	742	43	85	293	321	15	18	8	27	503	109	128
重 篤	40	40	3	5	20	12	-	-	-	-	19	8	13
重 症	85	83	10	15	38	20	1	1	-	1	55	15	14
中 等 症	190	181	18	18	61	84	2	7	2	9	104	37	38
軽 症	460	438	12	47	174	205	12	10	6	17	325	49	63

(2) 出火原因別発生状況

ア 出火原因別受傷時の状態

出火原因別及び負傷者の男女別で受傷時の状態をみたものが表 4-2-3 です。

出火原因別にみると、ガステーブル等が 115 人（14.8％）で最も多く、次いでたばこが 92 人（11.9％）、溶接器が 80 人（10.3％）などとなっています。

また、これら出火原因ごとの火災 1 件あたりの負傷者の発生率は、ガステーブル等が 37.7％（火災件数 305 件）、たばこが 14.1％（火災件数 651 件）、溶接器が 41.3％（火災件数 33 件）となっています。

受傷時の状態別でみると、ガステーブル等では初期消火中に受傷したものが 46 人（40.0％）で最も多く、次いで家事従事中は 35 人（30.4％）などとなっています。

放火では就寝中が 15 人（31.3％）で最も多くなっています。

表 4-2-3 出火原因別受傷時の状態

受傷時の状態	合 計	出 火 原 因											男 女 別	
		ガステーブル等	たばこ	溶接器	放火	大型ガスこんろ	電気ストーブ	石油ストーブ等	ライター	ロウソク	差込みプラグ	その他・不明	男 性	女 性
合 計	775	115	92	80	48	43	35	18	16	14	10	304	489	286
初 期 消 火 中	210	46	18	3	12	22	9	7	2	3	4	84	145	65
避 難 中	122	1	13	58	4	2	5	1	1	-	3	34	86	36
就 寝 中	101	5	27	-	15	2	10	3	1	2	-	36	59	42
作 業 中	96	5	3	15	-	16	-	1	2	2	2	50	74	22
家 事 従 事 中	60	35	2	1	-	-	-	-	1	-	1	20	23	37
休 憩 中	41	6	12	2	3	-	1	1	5	-	-	11	27	14
飲 食 中	10	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	7	6	4
救 助 中	9	-	2	-	1	-	1	-	-	-	-	5	6	3
通 報 中	4	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2	-	4
そ の 他 ・ 不 明	122	14	14	1	12	1	9	5	4	7	-	55	63	59

男女別では、男性が 489 人（63.1％）、女性が 286 人（36.9％）と男性の受傷割合が高くなっています。

受傷時の状態を男女別でみると、男女共に初期消火中の受傷割合が最も高くなっています。次いで男性は避難中、作業中の受傷割合が多く、女性は就寝中、家事従事中の受傷割合が多くなっています。

イ 受傷時の状態と受傷の理由

受傷の理由で多いものとしては、「火に接近しすぎた」が 132 人（17.0%）、「消火に手間取った」が 92 人（11.9%）、「自ら消火する能力がなかった」が 71 人（9.2%）などとなっています。

主な事例としては、初期消火中に燃焼物に接近しすぎて火炎にあおられる事例や、消火器を使用せずタオルや座布団を被せたり、油に水をかけるなど適切ではない方法で初期消火をしたために火炎が拡大したり、完全に消火することができず受傷する事例などがあります。「自ら消火する能力がなかった」ものは、出火時に家事従事中（調理中等）で着衣着火などにより受傷したものです。

(3) 30 日死者

30 日死者とは、火災による負傷者のうちで、48 時間を超えて 30 日以内に死亡した人のことをいいます。平成 30 年中は自損行為による 1 人を除いて、18 人が亡くなっており、前年よりも 11 人増加しています。

自損行為を除く 30 日死者 18 人の内訳は、後期高齢者が 9 人（50.0%）、次いで成人が 7 人（38.9%）、前期高齢者が 2 人（11.1%）となっています。

事例 2 たばこが落下したことに気付かず出火し、30 日死者が発生した火災			
構造・用途等	防火造 2/1 住宅	出火階・箇所	2 階・居室
焼 損 程 度	建物半焼 1 棟 41 m ² 焼損 負傷者 3 人		
この火災は、住宅 2 階の居室で発生したものです。			
出火原因は、居住者の息子が喫煙した際に、たばこの火種が落下したことに気付かなかったため、その後出火したものです。居住者の息子本人が火災を発見し、両親に火災を知らせた後に逃げ遅れ、消防隊により救出されました。母親が 119 番通報し、近隣住民により初期消火が行われましたが、消火することができませんでした。両親はそれぞれ避難しましたが受傷し、消防隊により救出された息子は二日後に死亡しました。			